

第57号

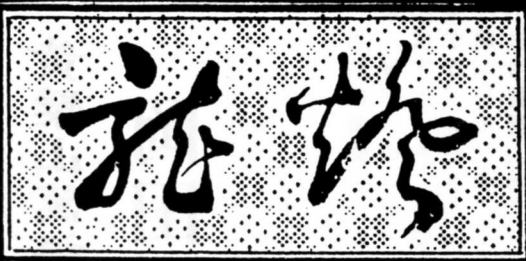
大阪市史跡 龍滝神師墓所 宝亀山九島院

発行所

〒550-0022 大阪市西区本田3丁目4番18号  
TEL 06(6583)2725 FAX 06(6583)0908

発行者

第二十五世住職 奥田啓知(智證)



平成二十一年春 阪神なんば線開通

# 高級料亭『船場吉兆』廃業

## のれんを妄信せず 自らの舌で選ぼう



牛肉産地偽装事件などで経営が悪化し再建中の高級料亭「船場吉兆」(大阪市中央区)は廃業に追い込まれました。客の食べ残した料理を使い回していたことが新たに発覚し、急速に客離れが進み、収益の確保の見通し立たなくなり、再建断念を決めたということです。

昨年十一月の営業休止前まで本店をはじめ船場吉兆の料亭4店すべてで客の残した料理の使い回しが行われていました。

客が手を付けずに回収された銀ダラやハモ、牛肉などの焼き物を再び調理して提供したり、折り詰め弁当に入れることもあったそうで、刺し身に使うワサビは、客が箸を付けた場合も回収し醤油に混ぜ「ワサビ醤油」として別の料理に使ったり、鰻井は電子レンジで温め直したうえ器を替え、石焼きにする魚介類やフルーツゼリーはそのままだ別の客に出すこともあったそうです。

女将の湯木佐知子社長が言う

「手付かずの残された料理」としても、別の客に使い回すなど老舗の高級料亭にとってあってはならないことです。

室町時代の禅僧の一休禪師にこんな逸話があります。京都の商家で盛大な法要があり、その導師に一休和尚が呼ばれました。和尚は気軽に引き受けました。が、そこは一休和尚。持ち前の茶目っ気を発揮し、どこからか汚ならしい着物を見つけてきて手足に煤(すす)をつけ孤(こも)をかぶってその商家へ行きました。

商家の主人はその姿を見るや下男に命じて、さんざん棒で打ち据え追い出させました。そのあと、和尚は金襴の袈裟に身を包んで、堂々と商家の門前に立ちました。主人は「どうぞ、どうぞ」と奥の座敷へ案内しようとしたのですが、「いや、愚僧はここで結構です」と一休和尚は動こうとしません。「ここは下郎の座るところですさあ、どうぞ奥へ」と主人。和尚は言いま

す。「では、この衣だけを奥へ連れて行ってください。中身のわしは、ここから追い返されたのですから・・・」(ひろさちあ著 仏教とっておきの話)

私たちは外見や名前、看板で判断してしまいがちです。そうした凡夫の性(さが)を逆手にとり、「船場吉兆」という老舗の暖簾(のれん)に思いがかり使い回しても、「吉兆」という暖簾に疑いを持たないと、客を馬鹿にした結果、こうしたことが常態化した結果、こうしたこと。私たちも暖簾や看板を妄信せず、自らの「舌」で本当に美味しい料理を食べたいものです。

数年前、たまたま愚妻と一緒に心齋橋の吉兆で食事をしようとしたことが予約がないとダメでした。高額の料金をとられたうえ、「手付かずの残された料理」はゴミンです。

新規墓地を開設しました。故郷の墓を移される方や寿塔(生前墓)分家墓をお考えの方 一度お問い合わせ下さい

